

20歳を過ぎたら定期的に子宮頸がん検診を受けましょう!

子宮頸がんは 検診で予防できる



子宮頸がんのより詳しい情報は…

早くわかれば、こわくない。子宮頸がん検診情報サイト

あかずきん.jp

<http://www.aka-zukin.jp>



ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

横浜市立大学医学部 産婦人科学教室 主任教授

宮城 悦子先生 監修

ねえ、知ってる？

子宮頸がんって、

20代から30代の女性に

増えているんだって！



20～30代の女性に増えている

性交渉の経験のある女性なら、誰でも子宮頸がんになる可能性があり、最近では20～30代の女性に急増しています。

子宮頸がん検診が予防の役割をする

20～30代に増えている背景には、性体験が低年齢化していること、この年代層の受診率が低いことがあると考えられています。子宮頸がんは、長い年月をかけて進行するので、その初期の段階で発見することができれば、結果的に子宮頸がんの予防につながります。

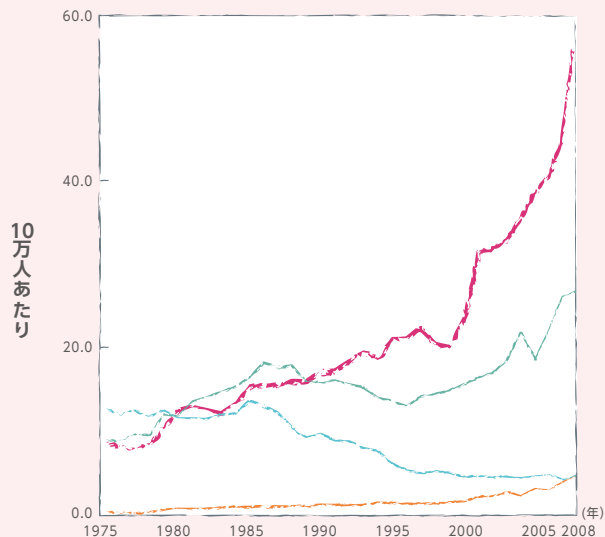
子宮頸がんは ごくありふれたウイルスによる 感染が原因です。

性交渉でのウイルス感染が原因です。

女性のがんで罹患率が高いのは乳がんですが、20～30代では子宮頸がんが増加しています。子宮頸がんとは、性交渉によって子宮の入り口（頸部）の細胞にウイルス感染することが原因で起こるがんです。

女性の各種がんの発症率の推移

20-39歳女性がんの罹患率推移(1975～2008年)



● 子宮頸がん(上皮内がんを含む) ● 子宮体がん ● 乳がん(上皮内がんを含む) ● 胃がん

「子宮頸がん」と「子宮体がん」は異なる子宮がん。

子宮がんは、子宮の入り口の頸部にできる「子宮頸がん」と、子宮奥の子宮体部にできる「子宮体がん」の2つに分けられます。子宮頸がんは、子宮がん全体の約6～7割を占めており、20代から30代の女性に一番*多いがんです。子宮体がんも最近やや増加傾向にあります。

*国立がん研究センターがん対策情報センター

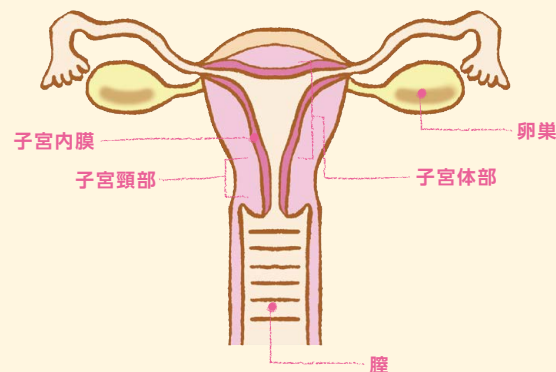
自覚症状がないから
検診を受けないと
見つからない
ということね。



2つの「子宮がん」の違い

	子宮頸がん	子宮体がん
自覚症状	無症状(初期)	不正性器出血
明らかになっている原因	HPV(ヒト・パピローマウイルス)	女性ホルモン
年齢のピーク	30～40歳代(20代急増)	50歳代
早期発見のポイント	検診	不正性器出血で受診

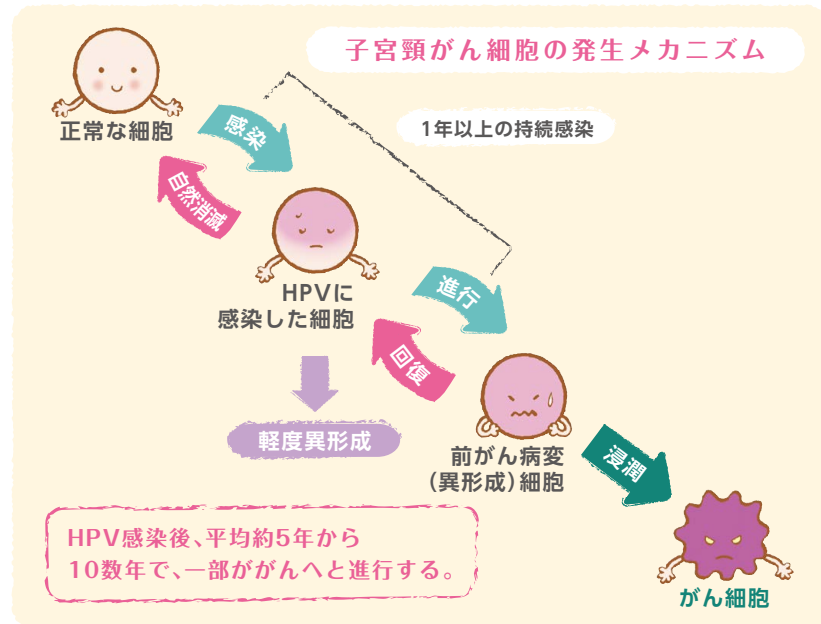
子宮のしくみ



感染した細胞が がんに進行するまでには 長い年月がかかります。

子宮頸がんはHPVによる感染が原因です。

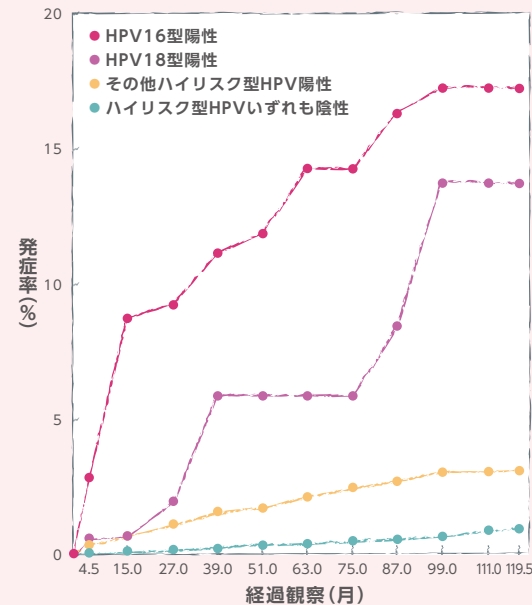
子宮頸がんは、性交渉によって感染するHPVというごくありふれたウイルスが原因です。たとえ感染しても、多くの人は自分の免疫力でウイルスを排除できます。ところが、約10%の人がウイルスを排除できずに感染が持続してしまい、一部の人でその細胞が変化します。この状態を「異形成」といいます。異形成は長い期間を経て子宮頸がんへと進行します。



ハイリスク型HPVとは？

HPVには100種類以上のタイプが存在することがわかっています。子宮頸がんに関係するHPVは主に14種類のハイリスク型HPVと呼ばれるウイルスですが、その中でも特にHPV16型、18型が子宮頸がんへと進展する可能性が高く、感染した後の進展するスピードが速いといわれています。

HPV16型と18型が陽性のがん発症率



HPV16型に感染した方ががんへ進展する場合10年間で

17.2%

HPV18型に感染した方ががんへ進展する場合10年間で

13.6%

ハイリスク型HPVに感染していない方ががんへ進展する場合10年間で

ほぼ**0%**

Khan MJ5 J Natl Cancer Inst. 2005;97:1072-1079.



定期的な検診によって 子宮頸がんは予防できます。

自覚症状がないから気づきにくい。

子宮頸がんを発症し、がんが多少進行しても、自覚症状はほとんどありません。

初期の子宮頸がん

まれに月経でないときの出血や、性交渉時、あるいはその後の出血がみられることがあります。ほとんどは無症状です。

子宮頸がんが進行

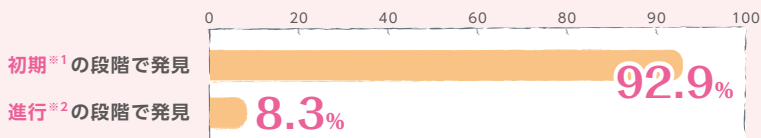
不正出血が多くなったり、おりものがピンクや褐色になったりします。そのうち、おりものに膿が混ざったり、悪臭がしたり、下腹部痛や腰痛、排尿障害や排便障害、血尿や血便などの症状が出てくる場合があります。

でも、早く見つければ決して怖くない。

「がん」と聞くと怖いイメージがありますが、決して恐れる病気ではありません。たとえハイリスク型HPVに感染したとしても、通常は免疫力で体内から自然消滅します。子宮頸がんは、早く見つければ治せる病気なのです。

5年生存率

*「がん」確定診断から5年経過後に生存している患者の比率



※1:がんが上皮内から子宮頸部にとどまっている状態

※2:がんが肺や肝臓など子宮から離れた臓器に転移している状態

定期検診が予防の役割を果たします。

子宮頸がんは長い年月をかけて進行するので、初期の段階で発見することがとても重要です。少なくとも2年に1度、定期的子宮頸がん検診を受けていれば、異形成が子宮頸がんに進行する前に発見することが可能であり、結果的に子宮頸がんの予防につながります。



女性のみなさまへ

子宮頸がんは、

早期に発見して治療できれば、

ほぼ100%治ります。

自覚症状がなくても

定期的な検診を受けることが大切です。

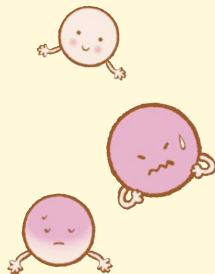
あかずきんより



子宮頸がん検査には「細胞診」と「HPV検査」があります。

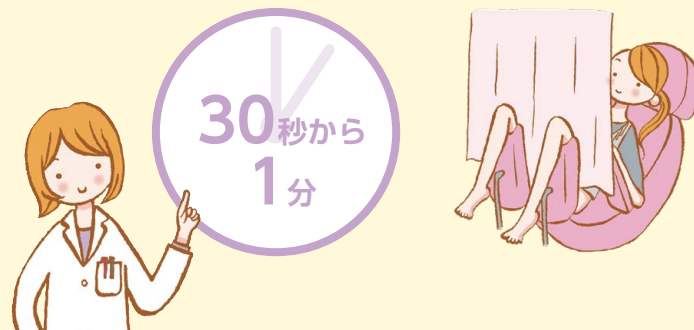
子宮頸部の細胞の変化を調べる「細胞診」

一般的にいわれる子宮がん検診とは、「子宮頸がん検診」を指し、「細胞診」という検査が行われます。細胞を顕微鏡で調べる検査です。正常な細胞に比べ、異形成やがん細胞は形が異なるので、発見できます。検査結果は、細胞がどのような状態なのかを推定した病変の分類法で報告されます。



検査は痛みもなく、1分ほどでカンタン

どちらも子宮頸部の細胞を採取して検査します。採取方法はまったく同じで、子宮頸部表面を綿棒やブラシでぬぐうだけ。個人差はありますが、基本的に痛みもなく、30秒から1分で終わります。



ウイルス感染を調べる「HPV検査」

この検査は採取した細胞にHPVが感染しているかどうかを調べます。感染していれば「陽性」、感染していなければ「陰性」と診断されます。また、最新の検査法を選択することで、すぐリスクの高いHPV16型と18型についての感染もわかります。



検査で早く発見すれば、予防につながる

細胞診で異形成や、HPV検査でウイルスによる感染が確認できても、慌てることはありません。この段階で発見できれば、がんに進行する前に治療できます。細胞診にHPV検査を併用することで、検診での「とりこぼし」を少なくする効果が期待されます。



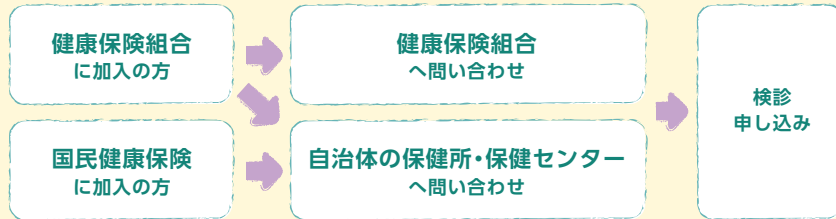
子宮頸がん検診 Column

no.1

子宮頸がん検査は、どんな方法で受けられるの？

20歳以上の女性なら、それぞれ加入している保険によって、健康保険組合や自治体で子宮頸がん検診が受けられます。

ご自分やパートナーが加入している健康保険組合や自治体などに、申し込み手続きや問い合わせをして、早期に検診を受けましょう。



no.2

子宮頸がん検診には助成金制度があります。

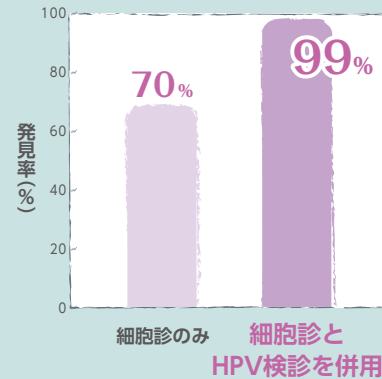
子宮頸がんが20代で急増しているため、厚生労働省では20歳から子宮頸がんの検診を受けることを勧めています。健康保険組合や自治体で実施する婦人科がん検診では、20歳以上なら検診費用(全額または一部)を職場や自治体が助成してくれます。HPV検査を希望する場合は、原則自費となりますが、徐々に補助を受けられる自治体が増えてきています。

no.3

海外ではHPV検査との併用が主流

最近の調査によると、「細胞診」が陰性の中にも一部、前がん病変が潜んでいることがわかってきました。「HPV検査」も合わせて受ければ安心。アメリカの子宮頸がん検診では、30歳以上の女性に「細胞診」と「HPV検査」の併用が積極的に推奨されています。

2つの検査の併用によってほぼ100%異常を発見



2種類の検診を組み合わせることで、見逃しが減るのね



米国予防医学作業部会レビュー

no.4

日本でも細胞診とHPV検査の併用について研究が進められています。

日本でも、「細胞診」と「HPV検査」を併用する有効性について自治体と国が協力し、さまざまな研究が進められています。また、一部の自治体で「HPV検査」の導入が始まっており、今後は多くの自治体に広がることが期待されています。

Q 「HPV検査」で陰性でした。もうこれから検診を受けなくてもいいですか？

A 性交渉によって感染するHPVは、およそ5～10年という長い期間を経て子宮頸がんに行進します。また、再感染することもあるため、まれな一部の子宮頸がんでは、HPVが検出されないこともあります。早期に発見して有効な治療を行うためにも、定期的に検診を受診することをお勧めします。

Q ワクチン接種をすれば、検診は受けなくてもいいのでしょうか？

A 定期的な検診と共に有効な予防法として、子宮頸がんのワクチン接種があります。しかしこのワクチンは、既に感染したHPVを排除する効果はありません。また、全てのHPVを防ぐものではないので、子宮がん検診をきちんと受けることが大切です。

Q 家族や親せきで子宮頸がんになった人がいなくても、検診を受けたほうがいいのでしょうか？

A 子宮頸がんの主な原因は、性交渉によって感染するHPV。遺伝や体質などはあまり関係なく、性交渉の経験のある女性なら誰でも子宮頸がんになる可能性がありますので、検診をきちんと受けましょう。

子宮頸がんが見つかってから
早期なら治療できます。

初期の子宮頸がんなら妊娠も可能です。

子宮頸がん検診によって、異形成などが
発見できれば、がんになる前に治療できます。

しかし、この段階を見逃すと初期がんの段階を経て、
浸潤という状態に行進してしまいます。

早期の段階で発見できれば、

簡単な手術で処置ができるので子宮も取らなくて
済み、適切な治療とフォローが行われれば

再発・転移することは
ほぼないといわれています。

